



研究会ニュース通巻 50 号に想う

VSI(火山珪酸塩工業)研究会会長(九州工業技術研究所所長) 陣内和彦

1. はじめに

VSI（火山珪酸塩工業）は、物理や化学あるいはバイオなどの分類に比べると、その範囲が非常に限られており、産業技術の一分野としても特殊などちらかと言えば地味な部類に属する。そのため、これまでにハイテク技術分野のような急速な発展も見られず、ブームを招来することもなかった。それでも本研究会がその前身から 20 年以上活動を継続し、ニュースも 50 号まで発行して来たことは、目立たないながら着実に一つの歴史を刻んできたことの証であり、注目に値することである。先ずはここに、これまでの本会の活動と運営に尽力していただいた歴代会長・役員・会員の皆様、特に本会の財政を支えて頂いた維持会員の方々へ心からの敬意と謝意を表する次第である。

さて、今回本号でニュース発行が通巻 50 号となる。私は今、1986 年 10 月発行の創刊号から今年 10 月発行の第 49 号までの全てを目の前に置いて本文を書いている。年 4 回の季刊発行をして来ているので、創刊以来 12 年間の蓄積である。このようなニュースの発行はこれまでの本研究会の活動を維持・発展させる大きな力となってきたし、今後ともそうあって欲しいと考えている。

この通巻 50 号を一つの節目ととらえて、私自身とニュースとの係わりや研究会の活動などについて振り返り、これからの VSI 研究会の新たな展開などに思いを馳せながら、以下に思い付くままを記してみたい。

2. ニュース創刊の経緯など

VSI 研究会のルーツは、九工研で開発されたシラスバルーンを世の中に出すため、1975 年 10 月に（財）日本産業技術振興協会の協力によって設立された「シラス工業懇話会」である。この懇話会が約 10 年を経て 1985 年に発展的に VSI 研究会へと移行した。企業中心の活動から、もう一度技術開発の原点に戻るべしとの認識のもと、研究会へ脱皮することになったのは当時の本田英昌会長の決断であった。

私事になるが、1986 年 7 月に九工研の研究企画官から資源開発部長として研究部へ戻ったときに、本田会長から研究会の運営と活動に協力せよとの依頼があった。元九工研所長からの半ば業務命令であったし、私自身シラスバルーンの開発グループのメンバーの一人であったので、進んでこれを引き受けた。

そこで私が本田会長に最初に提案したのが「ニュース」の発行である。研究会として定期的に活動を記録し、報告し、さらには営業活動における PR のためにも「広報誌」の必要性を強く感じたからである。会長からは即座に「やってくれ」と言われたので、身近な関係者に協力を依頼し、産と官からなる研究会員 8 名による編集委員会を結成した。記事の内容と構成、原稿執筆担当、外部への執筆依頼、表紙のデザイン、全体のレイアウト等々、詳細に打ち合わせが進められた。ニュースの版サイズは折りたたんで郵送する時の封筒の大きさを考慮して B5 版になったと記憶している。このような次第に

て、当時の編集委員会メンバーの積極的な協力により、スムーズに創刊号の発行にこぎつけることが出来た。そして、現在でもニュースのデザイン、記事の内容・項目も基本的なことはほとんどが創刊号にならっている。

以上がニュース創刊の経緯であるが、既に時効と思われるので、内輪話を紹介したい。本田会長の依頼を受けて私が研究会の運営に係わるようになって分かったことであるが、当時の研究会の年度の会計収支が 200 万円を越える赤字をかかえていた。理由はかなりの予算を注ぎ込んで出版した特集号の売れ行きが予想を大幅に下回ったためであった。そこで、赤字解消のために維持会員の年会費の負担を増やして頂くと共に、新規会員の加入を進めることとなり、私も関係のある企業を訪問したり営業活動に励んだが、その時このニュースが研究会活動の PR に大きな役割を果たしたことを覚えている。

3. ニュース発行から現在まで

1986 年 10 月 1 日発行の創刊号を読んでみると、当時のことがいろいろと思い出される。表紙のタイトル：「VSI ニュース」は木村委員（現、編集委員長）のデザインを採用し、その色については地下深部の熱いマグマを想起させる「燃える赤色」をイメージカラーとした。原稿も編集委員自身が書いたり、その知人や友人に依頼することから始まった。

また、会の財政事情もあって、ニュース発行に係わる経費削減にも心掛けた。原稿料を格安で執筆依頼することは勿論、印刷は写真製版で発注するため、原稿のワープロからレイアウトなど全てを印刷に出せるところまで仕上げるのが木村委員の有能な奉仕作業でカバーされた。この奉仕作業は現在まで続いており、ここに深く感謝する次第である。また、会の収入源を少しでも増やそうと言う維持会員の方からの提案によって、裏表紙に会員企業による有料広告を掲載することになったのは 13 号からである。

創刊号には、VSI 研究会本田会長の巻頭言と東工大名誉教授浜野先生、鹿児島県資源開発協議会石神会長、九工研小林所長等による祝辞に加えて、インドネシア国立人間居住研究所（Institute of Human Settlements）から建材研究部長の Z.Aksa 氏と所長の M.S.Ritonga 氏の連名

によるメッセージが寄せられている（肩書きは全て当時）。編集後記に私は『水面に投げられた石は小さくても、波紋は次第に広がっていく。そのような「一石」になることを期待して私達は編集に携わりたい・・・』と記した。国際化を意識しながら、研究会活動とニュース発行に意欲的に取り組もうとする意気込みを持っていたのである。「初心忘れるべからず」である。

1994 年 8 月発行の通巻 32 号からは、私の鹿児島県工技センターにおける勤務の忙しさを理由に、編集委員長を九工研の木村主研（現、室長）に交替してもらった。その後、前記のような原稿集めから出版までの一切の編集作業を一任して現在に至っている。

ニュースの内容については、創刊号から現在までの総目次が本誌 4 ページ以降に掲載されている。これらを順を追って拾い上げるだけでも、VSI に係わる分野が如何に多種多様であり、多分野にわたっているかが分かる。また、時代の変遷に伴ってその内容も変化していることが理解される。最近では、環境・リサイクルも重要な課題となっている。

更に特記すべきことは、研究会 20 周年記念事業の一つとして「新時代を築く火山噴出物—その性状と利用の手引き—」（松田応作編纂委員長・リアライズ社刊）を発行したことである。これはそれまでの研究会活動の集大成であり、VS（火山珪酸塩）の利用マニュアルとして関連の研究者、技術者に重宝されている。

以上のように、ニュース発行を中心とする編集活動を通じて現在までに蓄積された本研究会の技術情報は VS に関連してまとまった他に類のない貴重なものとなっている。

4. これからの研究会活動について

昨今の変化の激しい時代であって、社会のニーズに合致したこれからの研究会活動はどうあるべきか。これに対する回答や方針についても、既に発行されたニュースの中に、特に、巻頭言に記された学識経験者や歴代会長の挨拶などに示唆されている。あるいは繰り返しの部分もあるかと思われるが、少し触れてみたい。

まずは研究対象と課題であるが、火山噴出物の工業原料としての有効利用からスタートし、最近では人工の VS、例えば石炭灰やスラグなど

の産業副生物の有効利用も技術課題となっている。これは、環境・リサイクル技術が社会的な要請課題となっているため、1995年5月の総会において松田会長が就任挨拶の中で、研究会の新しい展開方向の一つとして強調されたことでもある。同様な視点から、現在都市部で大量に発生しているコンクリート系建設・建築廃材のリサイクルや都市焼却灰の処理（溶融ガラス化処理）なども緊急な研究課題である。

更に今後は、最近の各種先端技術を応用した材料開発や製品開発も検討すべきと考える。例えば、調湿機能や防かび・抗菌性を有する機能性建材の開発も興味あるテーマだと思われる。これは、最近当所の木村研究室で光触媒機能を有するチタンコーティング・シラスバルーンが開発されたことによって、具体化の可能性が大きくなっている。また、従来から多くの研究開発が行われているにもかかわらず工業的な利用に結びついていない分野であるが、天然および人工のVSをシリカ・アルミナ原料としてSiC、サイアロンなどのニューセラ・ファインセラ材料へ、あるいはCSH、ゼオライトなどのケイ酸質合成物へ利用する研究開発を、さらに低コスト化・高性能化することによって実用化に結びつける技術開発も再度検討すべきではないかと考えている。

次に、最近の我が国の科学技術開発関連施策の変化についても留意すべきである。

政府は我が国の経済産業の持続的発展を目指して「科学技術創造立国」を標榜しており、近年の科学技術関連予算を大幅に伸ばしている。その目的とするところは、新たな技術シーズによる新産業の創出とエネルギー・環境問題の解決を図ることである。従って、国家的なプロジェクトに加えて、ベンチャーの育成、中小企業の技術高度化、地域技術の振興などを目的とする種々の研究開発プロジェクト制度や研究開発助成制度を立ち上げている。これらは従来のばらまき型ではなく、「地域コンソーシアム研究開発」制度に見られるように、競争的な提案公募型の産学官連携体制による総合的な共同研究

開発プロジェクトを採択の対象としている。

今後当研究会としても、VS関連課題の中からテーマを抽出して、会員の有する特色ある得意技術と研究ポテンシャルを持ち寄ることによって、産学官によるプロジェクトフォーメーションに取り組み、公的な研究資金の導入を目指すべきだと考えている。

また、研究会独自でも財政の許す範囲で、平成8年度から始めた本研究会員への「委託研究制度」について、予算と件数を増やすなど、さらに充実させることが望まれる。

以上のように、新しい時代には新しい取り組みが必要であり、それをベースにして研究会活動の更なる発展を目指したいものである。

5. むすび

記録を残さない民族は滅びると言われている。ヘブライ文字が右から左へ書かれているのは、右手のハンマーで左手のたがねを叩いて文字を石に刻んだためだそうである。その結果、石に刻まれたヘブライ民族の歴史と文化はヨーロッパ文化の形成に重要な役割を果たし、現在に生きている。

少し大げさな例えをしてしまったが、VSI研究会ニュースが今までの研究会活動において果たしてきた役割・貢献も同様の視点から評価されるものである。ニュースの発行はその時々での広報の役割を果たすと共に、情報を記録としてしっかりと蓄積していく意味もまた大きい。本誌4～10ページの総目次をあらためて時間をかけて読んで頂ければ、私のこの思いは理解されると思う。そして、このようなニュースの継続的な発行により、VSI研究会の活動は、創刊号の編集後記に私が書いたような「水紋の広がり」ではなく、脈々とつながる「一筋の水道（みずみち）」を形成してきたことになる。

最後に、昨年中に相次いで亡くなられた元、前会長の本田、松田両先生の御遺志に報いるためにも、今後の研究会活動が一層発展し、その基盤としての情報誌の発行と記録の蓄積がさらに継続されることを切に望む次第である。

VSI 研究会ニュース総目次

第1巻 第1号(通巻1号, 1986年10月)～第14巻 第1号(通巻50号)

＜巻頭言・トピックス等＞	巻.号(通巻)頁	巻.号(通巻)頁
シラスの利用開発に想う……本田英昌・1.1(1)1		イタリアにおける火山灰利用研究について ……陣内和彦・6.3(20)1
新材料開発と VSI……浜野健也・1.1(1)2		VSI 研究会発足 5 周年に思う・玉井孝生・6.4(21)1
VSI 研究会ニュース発刊に際して・石神重男・1.1(1)2		地球環境と VSI……松田應作・7.1(22)1
TRASS (インドネシア産シラス) ……Z.Akusa, S.M.Ritonga・1.1(1)3		VSI 研究会に期待すること……小林和夫・7.2(23)1
火山噴出物利用の新しい展開を目指して ……小林和夫・1.1(1)3		ニュージーランドの VSI……神野好孝・7.3(24)1
高分子複合材料とシラスバルーン……鈴木三男・2.1(2)1		島根県における地下資源開発と VSI ……酒井禮男・7.4(25)1
最近の SPG 開発……中島忠夫・2.2(3)1		人々の生活を豊かにするー VSI 研究会 への期待ー……浜野健也・8.1(26)1
桜島降下火山灰の性状とその利用 ……藺田徳幸・2.3(4)1		「第3の波」：我が社とシラスのかかわり ……原之園馨・8.2(27)1
韓国産火山噴出物の利用研究・木村邦夫・2.4(5)1		雲仙, 普賢岳火山灰の活用……関 秀哉・8.3(28)1
鹿児島国際火山会議開催にあたって ……鎌田要人・3.1(6)1		「微粉碎シラスの機能性材料への応用」事業完了 ……陣内和彦・8.4(29)1
シラスオパールガラス……国府俊則・3.3(8)1		シラス雑感……諫山幸男・9.1(30)1
鹿児島国際火山会議に出席して ……島田欣二・3.4(9)1		火山噴出物としてのシラス……荒牧重雄・9.4(33)1
Active Utilization of Volcanic Ejecta Through International Cooperation Research……Chong-Min Lee・4.1(10)1		巻頭言……竹下寿雄・10.1(34)1
韓国産火山噴出物の有効利用研究ーゲル化 法による建材の製造ー……井上憲弘・4.2(11)1		新時代を築く火山噴出物……本田英昌・10.2(35)1
VSI 研究会に期待する……清水嘉重郎・4.3(12)1		会長新任のご挨拶……松田應作・10.3(36)1
火山灰からのガラス工芸品……丸山敏彦・4.4(13)1		厄介もの同士で新素材……田中 稔・10.4(37)1
翔ぶが如くにシラスを！……今川耕治・5.1(14)1		最も原理的なものは最も応用的・大庭 昇・11.1(38)1
工芸シラスガラスの開発……松尾靖隆・5.2(15)1		天然ゼオライトを用いたアルカリ骨材反応 の抑制技術……長野伸泰・11.4(41)1
インドネシアへ旅をしてー VSI 研究会 の目指す方向ー……陣内和彦・5.3(16)1		人工 VS “石炭灰” の高度利用を視点に ……陣内和彦・12.1(42)1
シラス開発について思う……石神重男・5.4(17)1		シラスの研究から SPG の開発まで……中島忠夫・13.1(46)1
未利用資源としての火山砕屑物の特性と その再開発について……小坂丈予・6.1(18)1		VSI 研究会の持続的発展……松田應作・13.2(47)1
		会長就任のご挨拶……陣内和彦・13.3(48)1
		研究会ニュース通巻 50 号に想う・陣内和彦・14.1(50)1
＜研究報告・技術紹介等＞		巻.号(通巻)頁
工業原料としてのシラスの利用……編集委員会・1.1(1)4		
シラスを原料とする特殊ガラス……木村邦夫・立山博・陣内和彦・濱崎廣教・2.1(2)2		
火山ガラス質堆積物の分布と性状……木村邦夫・2.1(2)4		
シラスを原料とする炭化ケイ素……島田欣二・2.2(3)2		
火成岩, 主として火山ガラスの原料特性とその利用……浜野健也・2.2(3)4		
建材産業の発展過程と将来展望……和田正武・2.2(3)5		
「シラス」のどのような性質が工業的に利用されているか……大庭昇・2.3(4)2		
シラスバルーンを用いた軽量押出建材……神尾典・2.3(4)4		
北海道における火山灰利用について……丸山敏彦・2.4(5)2		
シラスバルーンを骨材とした軽量 CFRC……秋浜繁幸・2.4(5)4		
火山灰の利用に関する基礎的研究……松元弘巳・3.1(6)2		
シラスから洗剤ビルダー用 A 型ゼオライトを合成する際の問題点……吉田章・3.1(6)3		

抗火石を利用した超軽量骨材(ネライト)と発泡体(ネックスフォーム).....	木村薫	3.2(7)1
シラス特殊ガラスの開発とシラスガラスの製品化.....	濱崎廣教・木村邦夫	3.2(7)2
シラス利用と SPG 開発.....	中島忠夫	3.2(7)4
抗火石を利用した新島ガラスの開発.....	鈴木蕃	3.3(8)2
結晶化シラス多孔体ガラスの開発.....	恒松修二	3.3(8)4
鹿児島国際火山会議の全体概要.....	編集委員会	3.4(9)2
第 3 分科会(シラス等火山灰資源の利用と企業化)オーラルセッション概要(5 件).....	編集委員会	3.4(9)3
同上ポスターセッション概要(14 件).....	編集委員会	3.4(9)4
火山ガラスの構造と加熱発泡性.....	立山博	4.1(10)2
プラスチック屋のシラス発泡苦闘記.....	大久保稔	4.1(10)4
火山灰のコンクリートへの有効利用について.....	角徹三	4.2(11)2
火山噴出物利用による軽量建材.....	牧内正文	4.2(11)4
建材製造における押出成形法.....	鬼頭伸一	4.2(11)5
通商産業省における住宅関連技術開発プロジェクトへの参画にむけて.....	陣内和彦	4.2(11)6
シラスバルーンを用いたポリマーセメントモルタルの試作研究.....	諫山幸男・松下博道	4.3(12)2
シラスを利用した CaO-MgO-SiO ₂ 系ガラス及びガラス繊維の製造.....	国生徹郎	4.3(12)4
シラスを原料とするゼオライト類の合成と利用.....	染川賢一・植村寿子	4.4(13)2
降下火山灰の固化・焼結による有効利用について.....	嘉門雅史・友久誠司	4.4(13)5
一火山噴出物の資源化一火山ガラスを主成分とする泡ガラスの製造.....	下野泰雄	5.1(14)2
シラスバルーンを用いた低温配管用断熱支持材の試作.....	神尾典	5.1(14)5
粉体のメカノケミストリーと新材料開発.....	仙名保	5.2(15)2
ゾルゲル法と新材料開発.....	作花済夫	5.2(15)5
抗火石を利用した建材用結晶化ガラスの開発.....	鈴木蕃	5.3(16)2
シラス紙を利用した侵漬型熱電対保護紙管の開発について.....	岡崎峯夫・林幸男・赤尾宏	5.3(16)5
シラス発泡体のロックウールボードへの利用.....	篠塚昌毅	5.4(17)2
シラスオパールガラスの製造方法.....	国府俊則	5.4(17)4
シラスを主原料とする窒化焼結体(第 1 報)ー加圧成形と造粒成形ー.....	濱崎廣教	6.1(18)2
スコリア溶融物の結晶化と物性に及ぼす添加物(ショ糖, CaO, MgO, SiO ₂)の影響.....	崔炳鉉・木村邦夫・池應業	6.1(18)5
火山性非晶質ケイ酸塩と水熱反応ー放射性廃棄物固定化への応用ー.....	山崎仲道	6.2(19)1
VS(火山珪酸塩)工業化の将来展望ー VSI 発展への二三の提言ー.....	松田應作	6.2(19)6
シラス・軽石の工業原料としての利用状況.....	岡山友正	6.3(20)2
シラス発泡体の製造と利用.....	高橋昭彦	6.3(20)4
パーライト製造の現状と今後の展望.....	有田義正	6.3(20)6
火山性起源の低結晶性含水珪酸アルミナ鉱物の加熱性状について.....	小坂丈予	6.4(21)2
シラスを主原料とする窒化焼結体(第 2 報)ースリップキャストによる常圧焼結体ー.....	濱崎廣教	6.4(21)6
シラスを主原料とする窒化焼結体(第 3 報)ーウィスカーの生成ー.....	濱崎廣教	6.4(21)7
微細火山ガラスの高度利用.....	神野好孝	7.1(22)2
シラスを主原料とする窒化焼結体(第 4 報)ーカーボン添加の影響ー.....	濱崎廣教	7.1(22)5
シラス発泡成形品の試作.....	大久保稔	7.2(23)2
福島白土発泡体とそのモルタル骨材への利用.....	深川文夫・木村邦夫	7.2(23)4
シラス発泡体と OA フロア.....	関博光	7.2(23)6
桜島火山灰を利用した歩道版ブロックの開発.....	原之園馨	7.2(23)8
VS 発泡体利用による押出建材.....	神尾典	7.2(23)10
FRP のリサイクルにおけるシラスバルーンの役割.....	小島昭・古川茂	7.3(24)2
コーティングによる天然軽石の吸水率低減.....	松下博道・諫山幸男	7.3(24)5
工業所有権ガイド.....	阿形明	7.3(24)8
SPG 膜によるアミノ酸の選択分離.....	中島忠夫	7.4(25)2
超微粒シラスバルーンの開発.....	木村邦夫	7.4(25)5
シラスバルーンのパネロセメント船への利用.....	北村茂	8.1(26)2

軽石を用いた吸音性コンクリートの開発	田中光徳	8.1(26)5
シリカバルーンを用いたモルタルとその物性及び吹付けモルタルに関する研究(第1報)	諫山幸男・濱崎廣教	8.2(27)2
福島白土を原料とする超微粒シリカバルーン	岡田博美・木村邦夫	8.2(27)4
シリカ溶射断熱皮膜の形成と利用	瀬戸口正和	8.2(27)6
抗火石利用による建設材料	中西正俊	8.2(27)8
シリカバルーンを利用した紙粘土	関博光	8.2(27)10
オレフィン-シリカ微粉複合多孔質体の研究	森田良繁	8.3(28)2
海外における VS (火山ガラス) 事情	陣内和彦	8.3(28)4
シリカを用いた耐久性コンクリート開発の可能性	武若耕司	8.3(28)7
炭酸リチウムを添加したシリカ焼結体	木村邦夫	8.4(29)2
シリカの微粉碎について	中重朗	8.4(29)5
微粉碎シリカ充填系の流動特性と力学的性質	西元研了	9.1(30)2
シリカバルーン JIS 規格の原案作成	木村邦夫	9.2(31)1
ITIT 国際シンポジウム：火山噴出物の利用技術	原尚道	9.3(32)1
抗火石を原料とするマシナブルセラミックス	鈴木蕃	9.2(31)2
超微粒シリカバルーンの製造	袖山研一	9.2(31)4
島根県内に産する火山ガラス質堆積物	飯塚信之	9.2(31)6
雲仙普賢岳噴出物の利用化研究	関秀哉	9.2(31)8
シリカを用いた FRP の再資源化-軽量モルタルの作製と耐久性評価-	小島昭・古川茂・宮下喜好	9.2(31)10
北海道の火山噴出物の利用について	丸山敏彦	9.3(32)4
火山珪酸塩の建材への利用	池口満湧	9.3(32)7
軽砂を用いた吹付けモルタルに関する研究(第2報)	諫山幸男・濱崎廣教	9.4(33)2
シリカバルーン市場動向調査の概要	今川耕治	9.4(33)5
膜乳化法による単分散シリカ微粒子の調整と粒子形成過程	清水正高・中島忠夫	10.1(34)2
雲仙・普賢岳の噴出堆積土砂の利用法に関する調査研究	新納格・浜武章	10.1(34)5
フィリピンにおけるピナツボ火山噴出物のセラミックスへの利用研究動向	木村邦夫	10.2(35)2
雲仙普賢岳噴出物のセラミックスへの応用研究動向	関秀哉	10.2(35)5
微粉碎シリカを用いた釉薬の研究	寺尾剛・神野好孝・川原キクエ・藺田徳幸	10.2(35)8
シリカバルーンを用いた軽量木質セメントボード	吉田弥明	10.2(35)11
V S 利用による軽量押出建材の開発研究	倉岡俊明・神尾典	10.2(35)14
雲仙・普賢岳の火山活動の現状 1989 年 11 月～1995 年 4 月	太田一也	10.3(36)2
シリカとモミガラ炭・竹炭から SiC の合成	濱崎廣教・立山博・木村邦夫・陣内和彦	10.4(37)2
インドネシア産火山噴出物と石灰との水熱反応硬化体	井上憲弘	10.4(37)5
シリカ微粒子を原料とするポリッシング剤	森田良繁	10.4(37)8
熱媒体流動層を用いた微粒シリカバルーンの製造	袖山研一・関博光	11.1(38)2
島根県内の新たな火山ガラスの存在	飯塚信之	11.1(38)6
ガラスの基礎と新しい展開-ケイ酸塩ガラス-	松田應作	11.2(39)1
雲仙普賢岳噴出物を原料とするセラミック中空球		
およびセラミックパネルの開発	内山休男・小林和夫・佐野秀明	11.2(39)5
雲仙普賢岳噴出物のコンクリートへの利用	岩瀬嘉市	11.2(39)8
粒子形状が粉体物性に与える影響について	簗嶋裕典	11.2(39)11
金沢市郊外に産する火山噴出物とその工業利用	丹後良一	11.2(39)14
火山活動は地球上のどのようところで起こっているのか?	澤田順弘	11.3(40)1
天然ゼオライトの精製と利用	堀江成	11.3(40)4
金属研磨剤としてのシリカの利用	田中秀穂	11.4(41)2
微粉碎火山ガラスを原料とする多孔質体	木村邦夫	11.4(41)5
“アカホヤ”火山灰層とアロフェン、イモゴライト	長友由隆	12.1(42)2
火山性堆積物を主原料とした新素材ダイライトについて	篠塚昌毅	12.1(42)5
フライアッシュの物性とその利用動向	小川紀一郎	12.2(43)1
シリカバルーン軽量焼成体の耐熱衝撃性と破壊予知	平田好洋	12.2(43)5

シラスバルーンの表面改質	小島昭	12.2(43)8
CHARACTERIZATION OF PINATUBO VOLCANIC EJECTA AND ITS MAGNETIC SEPARATION		
IN DRY SYSTEM	B.A.Visaya, K.Kimura, H.Tateyama, N.Inoue, K.Inoue and H.Hirosue	12.2(43)11
天然ゼオライトによるアルカリ骨材反応の抑制	長野伸泰	12.2(43)14
火山灰接触材による浄化槽処理水の再利用	小松良一	12.3(44)1
フライッシュを用いたケイ酸カルシウム硬化体の微生物保持担体としての有効性	平島康	12.3(44)3
タイセツバルーンを用いた軽量木質セメントボード	堀江秀夫	12.4(45)1
微粒シラスバルーンの物性	袖山研一・目義雄・神野好孝・浜石和人	12.4(45)5
アメリカロッキー山脈のピュウミス	木村薫	13.1(46)2
ポーラスコンクリートの透水性および強度	中澤隆雄	13.1(46)6
フライアッシュの大量有効利用の可能性	田代忠一・小村洋司・飯塚信之	13.2(47)2
シラスバルーン（サンキライト）の生産の状況と課題	深尾皓	13.2(47)5
微粒シラスバルーンを用いた軽量押出建材の開発	神尾典・木村邦夫	13.2(47)9
微粒シラスバルーンの製造と応用	袖山研一・目義雄・関博光・吉村景則・刀根俊二	13.2(47)13
微粒バルーンに関する調査研究	木村邦夫	13.3(48)2
山陰地方における新生代火山岩類	沢田順弘・麻原慶憲・小林伸治	13.4(49)1
しらすを利用したセメント代替用混和材の開発に関する基礎研究	武若耕治	13.4(49)7

＜特許紹介＞ 巻.号(通巻)頁

火山ガラスを原料とする白色度のよい	
洗剤用ビルダーの合成方法	4.4(13)8
強化ガラスの製造方法	4.4(13)8
負の熱膨張係数を有する	
結晶化ガラスの製造法	4.4(13)8
マイカバルーンの製造方法	4.4(13)8
シラス石鹼	5.1(14)7
シラスを主原料とする耐アルカリ	
ガラス繊維用組成物	5.1(14)7
シラス窒化物の製造方法	5.1(14)7
シラスとアルミナセメントを	
主成分とした着色水硬性物体	5.1(14)7
油吸収体	5.2(15)8
強化ガラスの製造法	5.2(15)8
シラスとアルミナセメントを	
主成分とした樹脂含浸水硬性物体	5.2(15)8
押出成形による軽量セメント製品の	
製造方法	5.2(15)8
ケイ酸カルシウム系建材の製造方法	5.3(16)8
シラスオパールガラスおよび	
その製造方法	5.3(16)8
シラスを主成分とする	
水硬性成形物の製造法	5.4(17)7
多孔質アルミニウム合金複合材の	
製造方法	5.4(17)7
発泡金属の製造方法	5.4(17)7
シラスから無塩砂及び複合無塩砂を	
工業的に製造する方法	5.4(17)7
シラスとセリウム酸化物含有	
アルミノけい酸塩ガラスの製造法	6.1(18)8
耐熱衝撃性ガラスの製造方法	6.1(18)8

巻.号(通巻)頁

低温配管用断熱支持材	6.1(18)8
シラス粉を骨材としてセメントの	
2次製品を製造する方法	6.1(18)8
複合材料の製造方法	7.1(22)8
耐熱含水爆薬組成物	7.1(22)8
字消し及びその製造方法	7.1(22)8
濾過材	7.1(22)8
車両用ゾルシール材	7.2(23)12
セラミックス合金複合体の製造方法	7.2(23)12
微小中空球体金属複合材料の製造方法	7.2(23)12
タイヤトレッド用ゴム組成物	7.2(23)12
凹凸模様を成形するための厚膜用塗料	7.3(24)10
切花などの植物用高分子組成物	7.3(24)10
セラミックス・金属接合体及びその製造方法	7.3(24)10
製鋼スラグの改質方法	7.3(24)10
パネルの製造方法	7.4(25)8
着色模様を有する	
板状シラス発泡体の製造方法	7.4(25)8
軽量珪酸カルシウム製品の製造方法	7.4(25)8
道路凍結防止用氷点効果剤と	
これを用いた道路凍結防止剤	7.4(25)8
シラス発泡体の製造方法	8.1(26)8
耐熱成形材用組成物及び	
成形製作の容易な耐熱成形材	8.1(26)8
合成樹脂漆器素地の成形材料	8.1(26)8
セメント組成物	8.1(26)8
防カビ性シラス発泡体の製造方法	8.2(27)12
長尺複合成形体及びその製造方法	8.2(27)12
分相性アベンチュリンガラス及び	
その製造方法	8.2(27)12
コンクリートの改良材及び改良方法	8.2(27)12

多孔質セラミック体及びその製造方法	8.3(28)10	耐火プラスチック材	11.2(39)16
セラミック成形体の脱脂方法	8.3(28)10	繊維強化セメントプレス成形体	11.3(40)7
押出成形用セメント組成物	8.3(28)10	吹付け用セメントモルタルの組成物	11.3(40)7
発泡セラミックス成形体の製造方法	8.3(28)10	断熱皮膜の成形方法	11.3(40)7
無機質発泡板の製法	8.4(29)8	無公害性耐火被覆組成物	11.3(40)7
軽量無機質成形体の製造法	8.4(29)8	廃棄アスファルト混合物の	
改良 C 種高炉セメント	8.4(29)8	処理方法およびその製品	11.4(41)9
軽量コンクリート補修用セメント組成物	8.4(29)8	無機質軽量焼成体の製造方法	11.4(41)9
無機軽量硬化体の製造方法	9.1(30)5	バインダー、該バインダーを使用した	
防臭性多孔質顆粒材料	9.1(30)5	樹脂成型品及びその製造方法	11.4(41)9
シリカバルーン成形体及びその製造方法	9.1(30)5	セラミック微細中空球体及びその製造法	11.4(41)9
軽量化粧板及びその製造方法	9.1(30)5	陶磁器製品の製造方法	12.1(42)9
熱追従性耐火被覆組成物	9.2(31)12	艶消し射出成型品	12.1(42)9
不燃性軽量樹脂複合体	9.2(31)12	耐火材及びその製造方法	12.1(42)9
無機ガラス発泡体の製造方法	9.2(31)12	シリカを単独原料として用いた	
単分散有機ポリマーベーズの製造法	9.2(31)12	黒色ガラスの合成方法	12.1(42)9
薄塗りに適した建築用下塗混和剤	9.3(32)10	無機建築板の製造方法	12.2(43)17
シリカを原料とする		無機ガラス発泡体の製造方法	12.2(43)17
セラミックバルーンの製造方法	9.3(32)10	低温度硬化性セラミック・有機	
非ゲル含水爆薬組成物	9.3(32)10	高分子複合塗膜の成形方法	12.2(43)17
耐熱性断熱材	9.3(32)10	塗材及び遮熱断熱工法	12.2(43)17
火山ガラスを用いた窯業焼結品	9.4(33)8	人工骨材の製造方法	12.3(44)7
セラミックバルーンの製造方法	9.4(33)8	水硬性セメントモルタル系人工木材	12.3(44)7
鑄造用消失模型の塗型剤	9.4(33)8	人工軽量骨材の製造方法	12.3(44)7
無焼成軽量無機質建材の製造方法	9.4(33)8	軽量、高強度の磁器用坯土	
無機質軽量建材の製造方法	10.1(34)8	及びその製造方法	12.3(44)7
耐火性ボード	10.1(34)8	断熱塗料及びそれを塗装した構造体	12.4(45)8
耐火被覆組成物	10.1(34)8	火山噴出物粒子含有多孔質体、多孔質	
エマルジョン並びに		セラミックス、脱臭剤及びに電波遮蔽材	12.4(45)8
球状シリカゲルの製法	10.1(34)8	カーペット用接着剤組成物	12.4(45)8
複合成型品の製造方法	10.2(35)17	セメント製品及びその製造方法	12.4(45)8
多彩被覆組成物	10.2(35)17	2 液硬化性塗料及び 1 液硬化性	
制振遮音材用組成物	10.2(35)17	塗料の洗浄剤	13.1(46)10
塩化ビニル発泡体	10.2(35)17	軽量モルタル、及び軽量モルタル化粧板等の	
ガラスコーティング板及びその製造方法	10.3(36)7	軽量モルタル化粧体、建築物の躯体等	
ゴム組成物および防振材	10.3(36)7	の表面に形成する軽量モルタル化粧層、	
軟化材	10.3(36)7	並びに築物の躯体等の表面に軽量	
シリカの活性化処理粉製造方法	10.3(36)7	モルタル化粧層を形成する方法	13.1(46)10
微生物担体の製造方法	10.4(37)9	電気粘性流体の製法	13.1(46)10
軽量硬化体の製造方法	10.4(37)9	研磨作業性に優れた耐摩耗性	
細粒セラミックバルーンの製造方法	10.4(37)9	塗料組成物	13.1(46)10
発泡セラミックボード	10.4(37)9	無機ガラス発泡体とその製造方法	13.2(47)17
製銅スラグの粉化防止材	11.1(38)7	残留塩素除去剤	13.2(47)17
超低比重シーリング材による		模型作製用又は補修用の 2 剤型	
自動車の防錆、防水処理方法	11.1(38)7	重点接着剤	13.2(47)17
無機質軽量建材及びその製造方法	11.1(38)7	超軽量モルタルコンクリートの製造方法	13.2(47)17
建築材料ブロック製造用組成物	11.1(38)7	人工軽量骨材の製造方法	13.3(48)8
シリカ壁材の製造方法	11.2(39)16	ハーフ質高速濾過助剤の製造方法	13.3(48)8
シリカ土壌の改良材及び改良方法	11.2(39)16	軽量成型体及びその製造方法	13.3(48)8
繊維強化材の製造方法	11.2(39)16	水ガラス組成物	13.3(48)8

軽量性熱硬化性樹脂組成物・・・・・・13.4(49)11
 空気入りタイヤ・・・・・・13.4(49)11
 成型用特殊中子を用いて成形した
 成形品・・・・・・14.1(50)11

微細中空ガラス球状体の製造方法・・・・14.1(50)11
 裏入込注入材料・・・・・・14.1(50)11
 吸水性組成物及びその製造方法・・・・・・14.1(50)11

＜新技術・新製品＞巻.号(通巻)頁

イデチ化成(株)・・・・・・1.1(1)5
 清新産業(株)・・・・・・1.1(1)5
 三機工業(株)・・・・・・2.1(2)6
 昭和化学工業(株)・・・・・・2.1(2)6
 釧路石炭乾溜(株)・・・・・・2.2(3)8
 東海工業(株)・・・・・・2.2(3)8
 日本フネン(株)・・・・・・2.3(4)6
 (株)ジェイ・エフ・ビー・2.3(4)6
 日本ライトグラベル
 関西販売(株)・・・・・・2.4(5)6
 新島物産(株)・・・・・・2.4(5)6
 第一エンジニアリング(株)・・・・2.4(5)7
 クリスタルフォーム(株)・・・・・・2.4(5)7
 大建工業(株)岡山工場・3.1(6)6
 サンセラミックス(株)・3.2(7)6
 大阪セメント(株)・・・・・・3.2(7)6
 三菱鉱業セメント(株)・3.3(8)6
 マルティグラス(株)・・・・3.3(8)6
 (株)テルナイト・・・・・・3.4(9)8
 メタリックエンジニアリング(株)・3.4(9)8
 三井金属パライト(株)・・・・4.1(10)6
 (株)ヤマウ・・・・・・4.1(10)6
 積水化学工業(株)・・・・4.3(12)6
 エースコン工業(株)・・・・4.3(12)6
 (株)サンドエール・・・・4.4(13)9
 岩倉化学工業(株)・・・・4.4(13)9
 麻生セメント(株)・・・・5.1(14)8
 藤井鉱業(株)・・・・・・5.1(14)8
 日本磁力選鉱(株)・・・・5.2(15)9
 丸中白土(株)・・・・・・5.2(15)9
 昭和鉱業(株)・・・・・・5.3(16)9
 本田鐵工(株)・・・・・・5.3(16)9

巻.号(通巻)頁

(株)シラックスウ・・・・5.4(17)8
 鍋順瓦工業(株)・・・・・・5.4(17)8
 スパインケミカル(株)・・・・・・6.1(18)9
 緑営セラミック(株)・・・・6.1(18)9
 第一高周波工業(株)・・・・6.2(19)9
 (株)神戸製鋼所・・・・・・6.2(19)9
 美瑛白土工業(株)・・・・6.3(20)8
 宇部興産(株)・・・・・・6.3(20)8
 (株)カルシード・・・・・・6.4(21)10
 秩父セメント(株)・・・・6.4(21)10
 イデチ化成(株)・・・・・・7.1(22)9
 清新産業(株)・・・・・・7.1(22)9
 三機工業(株)・・・・・・7.2(23)13
 昭和化学工業(株)・・・・7.2(23)13
 釧路石炭乾溜(株)・・・・7.3(24)11
 東海工業(株)・・・・・・7.3(24)11
 (株)浅羽製作所・・・・・・7.4(25)9
 日本フネン(株)・・・・・・7.4(25)9
 マルティグラス(株)・・・・8.1(26)9
 日本ライトグラベル
 関西販売(株)・・・・・・8.1(26)9
 新島物産(株)・・・・・・8.2(27)13
 大建工業(株)・・・・・・8.2(27)13
 三菱マテリアル(株)・8.3(28)11
 インフラテック(株)・8.3(28)11
 三井金属鉱業(株)・・・・8.4(29)9
 積水化学工業(株)・・・・8.4(29)9
 岩倉化学工業(株)・・・・9.1(30)6
 麻生セメント(株)・・・・9.1(30)6
 エースコン工業(株)・9.2(31)12
 丸中白土(株)・・・・・・9.2(31)12
 本田鐵工(株)・・・・・・9.3(32)11

巻.号(通巻)頁

小野田エー・エル・シー(株)・9.3(32)11
 昭和鉱業(株)・・・・・・9.4(33)9
 (株)神戸製鋼所・・・・・・9.4(33)9
 スパインケミカル(株)・・・・10.1(34)9
 旭硝子(株)・・・・・・10.1(34)9
 美瑛白土工業(株)・・・・10.2(35)18
 (株)カルシード・・・・10.2(35)18
 カライト工業(株)・・・・10.3(36)8
 (株)浅羽製作所・・・・10.3(36)8
 清新産業(株)・・・・・・10.4(37)10
 三機化工建設(株)・・・・10.4(37)10
 釧路石炭乾溜(株)・・・・11.1(38)8
 (株)シラックスウ・・・・11.1(38)8
 イデチ化成(株)・・・・11.2(39)18
 日本ライトグラベル
 関西販売(株)・・・・11.2(39)18
 日本フネン(株)・・・・11.3(40)8
 大建工業(株)・・・・・・11.3(40)8
 昭和化学工業(株)・・・・11.4(41)10
 新島物産(株)・・・・・・11.4(41)10
 藤井鉱業(株)・・・・・・12.1(42)10
 岩倉化学工業(株)・・・・12.1(42)10
 三井金属鉱業(株)・・・・12.2(43)18
 丸中白土(株)・・・・・・12.2(43)18
 昭和鉱業(株)・・・・・・12.3(44)8
 アジア理化工(株)・・・・12.3(44)8
 (有)創生・・・・・・12.4(45)10
 美瑛白土工業(株)・・・・13.1(46)11
 宇部マテリアル(株)・・・・13.1(46)11
 湯野建設(株)・・・・・・13.2(47)18
 日本防火ライト工業(株)・13.3(48)9
 (株)東洋工熱・・・・・・13.4(49)11

＜研究室案内＞

巻.号(通巻)頁

北海道立工業試験場 野幌分場・・・・6.1(18)10
 北海道工業開発試験所・・・・・・6.2(19)10
 鹿児島県工業技術センター 窯業部・・・・6.3(20)9
 宮崎県工業試験場・・・・・・6.4(21)11
 宮崎県工業試験場 開発化学科研究室・6.4(21)11
 都城工業高等専門学校 工業化学科・・・・7.1(22)10
 鹿児島大学 工学部
 応用化学科 機能材料工学講座・・・・7.2(23)14
 鹿児島大学 工学部
 応用化学科 分子工学講座・・・・・・7.3(24)12

巻.号(通巻)頁

第一工業大学 工学部
 土木工学科 環境材料開発研究室・・・・7.4(25)10
 九州共立大学 工学部
 土木工学科 土木材料研究室・・・・・・8.1(26)10
 島根県立工業技術センター 資源科・・・・8.2(27)14
 東京都立工業技術センター
 無機化学部 ガラス・セラミックス研究室・・・・8.3(28)12
 青森県工業試験場 窯業・化学部・・・・8.4(29)10
 九州工業技術研究所・・・・・・9.1(30)7

九州工業技術研究所 ファイン素材部	
資源化学研究室	9.2(31)12
同上 粉体プロセス研究室	9.3(32)12
同上 環境材料研究室	9.4(33)10
山梨県工業技術センター	
研究第2部 化学工学科	10.1(34)10
鹿児島大学 工学部	
海洋土木工学科 海洋建設工学講座	10.2(35)19
佐賀大学 低平地防災研究センター	10.3(36)9
長崎大学 工学部	
材料工学科 極限材料研究室	10.4(37)11

長崎県工業技術センター海洋技術科	11.1(38)9
北海道工業試験場	
化学技術部, 資源エネルギー部	11.2(39)19
鹿児島大学 理学部	
地学科 岩石及び鉱物学講座	11.3(40)9
鹿児島県工業技術センター	
素材開発部	11.4(41)11
島根県立工業技術センター	
浜田工業技術指導所 窯業科	12.4(45)9
福島県ハイテクプラザ	13.3(48)6

<随 想>

巻.号(通巻)

シラスとの出会い	濱崎廣教・1.1(1)～ 4.4(13)
シラスに寄せて	久保道郎・梅野昭平・5.1(14)～ 5.4(17)

<会務報告・お知らせ等>

巻.号(通巻)頁

巻.号(通巻)頁

第1回現地研究会(新島抗火石)報告	6.4(21)9	第5回現地研究会(雲仙普賢岳)報告	10.3(36)10
第2回現地研究会(東北地区)報告	7.3(24)13	第6回現地研究会(島根県)報告	11.3(40)10
第3回現地研究会(南九州地区)報告	8.3(28)13	第7回現地研究会(四国地区)報告	12.3(44)6
第4回現地研究会(北海道)報告	9.3(32)13	第8回現地研究会(岡山地区)報告	13.3(48)7

VSI 研究会発行図書案内	
新時代を築く火山噴出物—その性状と利用の手引き—	
1. 序 説 1.1 火山噴出物を知る 1.2 火山噴出物を使う 2. 火山噴出物の性状 2.1 火成岩, 主として火山ガラスの原料特性 2.2 火山ガラス質堆積物の分布と性状 2.3 火山ガラスの構造と加熱発泡性 2.4 未利用資源としての火山砕屑物の特性 2.5 桜島降下火山灰の性状 2.6 雲仙普賢岳噴出物の性状 2.7 抗火石 2.8 海外における火山珪酸塩事情 3. 火山噴出物の利用 3.1 シラスの工業利用総論 3.2 土木建設材 3.3 加熱発泡体 3.4 工業・建築用ガラス 3.5 工芸ガラス	3.6 ゼオライトの合成 3.7 セメント・コンクリート 3.8 セラミックス 3.9 複合材 3.10 その他 4. 将来への期待 4.1 西暦二千年シラスが建築材料の主原料に 4.2 火山噴出物, 特にシラスの利用 —今後の展開— 4.3 研究開発の将来に期待すること 資 料 編 ◎火山珪酸塩工業関連文献紹介 ◎火山珪酸塩工業関連特許紹介 ◎火山珪酸塩工業関連研究機関紹介 ◎V S I 研究会の組織とその20年 ◎V S I 研究会規格"シラスバルーン"の提案 ◎中空フィラー市場動向調査の概要 ◎火山珪酸塩工業関連企業製品ガイド
1995年10月発行(B5版、300頁) 特別価格4,000円(税込)で頒布中 FAX・郵便のいずれかで, 下記宛お申し込みください。 〒841-0052 佐賀県鳥栖市宿町807-1 九州工業技術研究所内 VSI 研究会事務局 FAX 0942-82-5509	

特許紹介

公報抜粋

①公開番号

②公開日

③出願日

④出願人

⑤発明者

成形用特殊中子を用いて成形した成形品

①特開平 08-10901

②平成 8 年 1 月 16 日

③平成 6 年 6 月 23 日

④根本 卓

⑤根本 賢

本発明は形状の制約を受けることなく品質に優れた広範な形状の鋳造品やプラスチック成形品やセラミック成形品等の成形品を効率よく得ることができる成形用特殊中子を用いて成形した成形品を提供するものである。成形用特殊中子は、川や海や山の砂礫とうの崩壊可能な材料から形成された中子本体と、中子本体の表面を覆う所定厚さの耐熱性材料からなる外体とからなる。成形用中子を上型と下型との間に配設することにより、成形型を形成し、成形型の内部には、成形品の形状に応じた形状の空洞部を形成することができる。

微細中空ガラス球状体の製造方法

①特開平 07-315869

②平成 7 年 12 月 5 日

③平成 6 年 5 月 20 日

④工業技術院長，株式会社カルシード

⑤木村邦夫，石橋修，松田健一郎，本木潤一，岡田博美

本発明は、火山ガラス質堆積物を原料として、微細中空ガラス球状体を製造する方法の改良に関するものである。具体的には、火山ガラス質堆積物粉末を、水ガラスやヘキサメタリン酸ナトリウムやピロリン酸ナトリウム 0.05 ～ 0.5 重量%を含有する水溶液中に分散させ、分級して粒度 5 ～ 20 μ m の粒子を得たのち、分級粒子を 900 ～ 1100 $^{\circ}$ C で 1 ～ 60 秒間熱処理するか、又は 0.3 ～ 3 規定塩酸水溶液と分級粒子とを、容量と重量との比が 1 ～ 1.5ml/g となるように混合し、150 ～ 200 $^{\circ}$ C，0.5 ～ 1.5MPa の水蒸気圧下 8 時間以上水熱処理したのち、この粒子を 900 ～ 1100 $^{\circ}$ C で 1 ～ 60 秒間熱処理し、次いで水中における浮沈分離又は空気分級することにより、微細中空ガラス球状体を製造するものである。

裏入込注入材料

①特開平 07-331993

②平成 7 年 12 月 19 日

③平成 6 年 6 月 13 日

④東京瓦斯株式会社，株式会社奥村組

⑤林光俊，長島伸吾，蔵品稔，和田洋

本発明は推進工法によってヒューム管や鋼管等の管体を地中に埋設する際に、該管体と堀削地盤との間に注入、充填して管体の円滑な推進を図るための裏込注入材料に関するものである。具体的には、ベントナイト等の粘性材料と水との混合材に比重が微小中空球体と称されている比重が 0.02 ～ 0.8 のマイクロバルーンを適量、混合して比重が管体の見かけ比重と同等の裏込注入材料を調製し、この裏込注入材料を管体と堀削地盤又は不透水性膜材との間に注入することによって、管体を浮上させることなく該裏込注入材料 5 内で潜水状態で推進させるようにし、さらに、マイクロバルーンによるボールベアリング効果で推進抵抗を一層減少させて、管体の施工性を向上させるものである。

吸水性組成物及びその製造方法

①特開平 08-10616

②平成 8 年 1 月 16 日

③平成 6 年 6 月 30 日

④株式会社北陸ファインケミカル，
株式会社日本触媒

⑤柳澤 勲，塩路尚武

本発明は、例えば、コンクリート打設時の余剰水吸水材、土壌改良材、血液凝固材、各種廃液吸収材等、種々の分野に好適に用いられる吸水性組成物及びその製造方法に関するものである。具体的には、多孔性無機粒子が水性液体を毛細管現象によって速やかに浸透させるので、吸水性樹脂が備える吸水特性、例えば、水性液体に接した際の高い吸水倍率や優れた吸水速度、水性液体の拡散性および通液性、水性液体を含んだ基材から水を吸い上げる吸引力等を十分に発揮させることができる。

(文責 立山 博)

会務報告・お知らせ・ニュース・編集後記

[平成 10 年度第 2 回微粒バルーン部会報告]

平成 10 年 12 月 16 日(金)14:00～17:00, 九州工業技術研究所大会議室にて開催。①追加試料の測定, 複合予備実験結果, ②公開用資料について, ③話題提供: 木村部会長, ④情報交換, ⑤今後の方針などについて意見交換した。次回は 3 月に九州工業技術研究所で開催の予定(開催日未定)。

[平成 10 年度研究講演会開催案内]

昨年同様, 日本セラミックス協会および資源素材学会の協賛のもとに, 下記の要領で研究講演会を開催します。参加申込は, 本会事務局まで。

日 時: 平成 11 年 1 月 28 日(木)13:00～17:00

場 所: 総評会館(東京都千代田区神田駿河台 3-2-11) TEL 03-3253-1771

参加費: 会員 1,000 円, 協賛学協会会員 4,000 円, 非会員 7,000 円, 交流会 6,000 円

(上記参加費には, テキスト代 1,000 円を含む)

プログラム

13:10 シラスおよび類縁鉱物によるセシウムおよびストロンチウムの固定化

鹿児島大学工学部 植村寿子

13:50 下水汚泥焼却灰を原料とした結晶化ガラスの開発

東京都立産業技術研究所 鈴木 蕃

14:30 福島県福島市飯坂町に産する火山ガラス質堆積物 丸中白土(株) 紺野四郎

15:30 シラスバルーン-石英-アルミナセメント系新磁器素地

九州工業技術研究所 太 源弼

16:10 光半導体触媒と酸化チタン被覆シラスバルーン 九州工業技術研究所 木村邦夫

17:30 交流会

[新維持会員紹介]

括弧内は本会に対する代表者(有)メディオ企画(代表取締役 平岡睦啓)

〒 811-2415 福岡県粕屋郡篠栗町大字津波黒 95-1
TEL, FAX 092-948-0390

[編集後記]

本号で通巻 50 号になりました。創刊した 1986 年から 1994 年 4 月 1 日発行の通巻 31 号までの初代編集委員長は陣内和彦会長です。1～3 ページに, 総括されているように, この研究会ニュースが研究会の継続に大きく貢献しているのは間違いないと思います。現編集委員の河村和政, 岡田博美, 長野伸泰, 中島忠夫, 神野好孝, 立山博, 井上憲弘, 神尾典の各氏, 元編集委員であった岡山友正, 藺田徳幸, 濱崎廣教, 丸山敏彦, 中里一英の各氏に感謝いたします。創刊号から編集委員として原稿の割付, ワープロ仕上げに携わり, 通巻 32 号から引き受けた編集委員長ですが, 年々仕事が増え, 編集委員会も計画通り開けず, 編集委員の方には申し訳ないと思っています。

数回にわたる事務局移転を経て, 本年 4 月に九州工業技術研究所内の私の研究室に事務局を移しました。現在は, 研究会事務局長, 事務員, 編集委員長, 原稿の割付・ワープロ仕上係を兼務している状況で, 先行き不安になります。維持会員数が増加し, 常勤の事務員, 原稿の割付・ワープロ仕上係を雇用できるような環境が整えられることを夢見ています。また, 会員の中から第 3 代編集委員長が生まれることを期待しています。

さらに, 今後, 機関誌を充実させ, 研究会を発展させるために, 会誌名の変更も必要と思われます。通巻 51 号から, VSI(火山珪酸塩工業)研究会会報, Bulletin of Japan Society of the Volcano Silicates Industry への衣替えが検討されています。会員各位のご意見をお待ちしています。

(kimura@kniri.go.jp)

VSI 研究会ニュース(通巻 50 号)

1999 年 1 月 1 日発行

VSI(火山珪酸塩工業)研究会

http://www.kniri.go.jp/stuff/stuff/kimura/vsi_j.html

〒 841-0052 佐賀県鳥栖市宿町 807-1

九州工業技術研究所内

TEL 0942-82-5161(代) FAX 0942-82-5509